

## 夜間行動を主訴に行動診療科を受診した 高齢犬 24 頭の後ろ向き調査

小澤真希子<sup>1), 2), 3) †</sup> 岸野友祐<sup>2)</sup> 津山 悠<sup>3)</sup> 川畑 健<sup>2)</sup> 牛草貴博<sup>1)</sup>

- 1) 横浜市 開業（横浜動物医療センター関内どうぶつクリニック：  
〒231-0015 横浜市中区尾上町 6-90）
- 2) 神奈川県 開業（川畑動物病院：〒239-0844 横須賀市岩戸 1-11-15）
- 3) 東京都 開業（品川 WAF どうぶつ病院：〒141-0032 品川区大崎 5-1-5）

（2022年8月9日受付・2022年10月5日受理・2022年11月30日公開）



本文はこちら

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/75/11/75\\_e199/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/75/11/75_e199/_article/-char/ja)

### 要 約

夜間行動を主訴として行動診療科に来院した高齢犬 24 頭を対象とし、後ろ向き調査を実施した。夜間行動の要因疾患は認知機能不全症候群（CDS）、皮膚疾患、腫瘍性疾患、クッシング症候群／下垂体腫瘍が多かった。対象症例の約 5 割で CDS が夜間行動の要因疾患として診断されたが、身体疾患は 8 割以上で診断され、身体疾患の診断率が CDS の診断率を上回った。夜間行動として運動と発声をともに示した犬では CDS 保有率が約 9 割であったが、運動のみあるいは発声のみ示した犬では 4 割以下であった。追跡調査の結果、夜間行動は約 6 割の犬で死亡時まで継続したが、要因疾患の治療で完治に至った犬も約 2 割認められた。本研究の結果から、高齢犬の夜間行動は身体疾患の関連するものが多く転帰は保有疾患ごとに異なるため、鑑別診断がきわめて重要であることが示唆された。

——キーワード：高齢犬，認知機能不全症候群，夜間行動。

----- 日獣会誌 75, e199～e204 (2022)